

ヒロシマをあらわすこと

岡本 芳枝

私は、1991年から2006年までの15年間、広島市現代美術館で学芸員の職に就いていた。その後、異動により、5年間の広島市文化財団（現・広島市未来都市創造財団）事業課を経て、現在、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で被爆体験記による展覧会の企画、被爆体験の代理執筆、被爆者証言ビデオの制作等の仕事に携わっている。

美術館学芸員時代から、アーティストにヒロシマと関わってもらう仕事をしてきた。アーティストが真摯に表現と向かいあう時、人間の尊厳、存在を否定した原爆投下、それによる生と死との問題は、決して避けては通れないことだった。

このエッセイでは、中でも最もヒロシマに関わり続けたアーティスト、岡部昌生（1942年根室生まれ）の紹介から始め、現在の私の仕事を自問することにより、ヒロシマをイメージした表現の可能性、そして、ヒロシマを継承すること、まだ途上にある（決して終わることのない）原爆投下の歴史の検証について考えてみたい。

岡部は1977年からフロッタージュ（擦り取り）による作品を制作してきたことで知られていた。岡部とヒロシマとの関わり

は、広島市現代美術館の開館に合わせて国内外のアーティスト78名に、ヒロシマをテーマとした作品を制作委託したことに始まっている。その際には、1987年と88年の2度にわたり、夏の広島の上を爆心地から遠い距離から徐々にフロッタージュした各4・5×1・5メートルの迫力に満ちた連作7点（横幅の全長約10メートル）《ヒロシマ―8月の路上 1987/88》（写真1）を完成させている。

それから時を経て、私は、被爆51年目の1996年に、市民との協同による夏のワークショップ「ヒロシマ・メモワール」⁹⁶を岡部とともに行った。原爆死没者慰霊碑前の道に一直線に不織布を敷き、市民約100人との協同で、赤いオイルチョークでフロッタージュにより染め上げた作品を制作（写真2・3）。一方で、旧国鉄宇品駅プラットホームの花崗岩の縁石に黒いキャンソンプをあて、黒い芯ペンシルでフロッタージュすることをを行った（写真4・5）。この活動は、広島市の平和都市としての側面と軍都だった歴史の暗部を対照的に浮かび上がらせるものとして成功であった。

旧宇品駅は、1894年の日清戦争開戦と同時に、宇品港から兵士や軍事物資を送り出す拠点と広島駅とを結ぶ線路が沿線の一般市民をも動員し、わずか16日という急拵えで作られ、その後、いくつもの戦争を経て、第二次世界大戦終結時まで機能していた。600万人の兵士がこの港から出征したと言われている。

ワークショップを行った1996年には、既に一部は立ち入り禁止になっていたものの、約600メートルに及ぶプラットホームが残されていたその様は、広島が一大軍事都市であったことを

強烈に印象づけるものだった（2004年5月に広島南道路建設のため取り壊された）。

岡部はワークショップ開催年以降も、プラットホームがなくなるその時まで、毎年2度3度と広島に足を運び、約4500点の作品を作り続けた。白いキャンソン紙に黒の芯ペンシルで制作されたその作品群は、『THE DARK FACE OF THE LIGHT（光の影）』（写真6）と名付けられた。国際平和文化都市広島部の暗部を意味するタイトルであることは言うまでもない。

これらの作品群は、その後、2007年の第52回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館（コミッショナー・港千尋）代表作家の個展としてひとつの集大成をみた（写真7）。（岡部の広島での作品制作は被爆時の写真の銘板『原爆被災説明板』をフロッタージュしたもの、『被爆樹に触れて』、『土の記憶』など多岐に渡っているが、ここでは『THE DARK FACE OF THE LIGHT』にのみ触れておく）

アーティストは直感的に対象を掴み取り、イメージ化することで、他の表現媒体と同じく、それに触れる者に真実を伝える。私はアートの力を信じている。

一転、現在の仕事、特に被爆体験の代理執筆や被爆証言ビデオの制作は、事実の正確な記録が重要である。広島原爆戦災誌（広島市発行。昭和30年代の半ばから編纂が始まり、昭和46年（19

71年）に全5巻が刊行された）にも載っていない新たな事実が、被爆証言の聞き取りを進めるうちに明らかにすることがある。

例えば、ある国民学校高等科の学徒動員先には掲載されていない、高射機関銃の弾の旋盤への従事、黒い雨の降った時間・地域、投下直後の広島市の各所の惨状、等。ヒロシマの歴史は未だ日々書き換えられねばならず、それは、個々人の体験とその積み重ねでしか成り立たないことを実感する。アートが直感的に伝える真実は重要であるが、イメージでしかないとを反省させられてもいる。

今現在、アクティヴィスト山下陽光のアトム書房（被爆直後に原爆ドーム近くにできた古書店。土産物として被爆瓦等も販売。店主は故杉本豊）の調査やアーティスト集団 Chin → Pon（セーナを飛ばし、広島の上空に飛行機雲でピカッの文字を描いたことで騒動となった）の個展の手伝いも行っている。

今も、自覚としてはキュレーターであることと被爆体験を丹念に追う仕事は、分断しているようだが、決してそうではない。これからも、いや、これからは、アーティストの作品制作のイメージをより強固に、より真実に近づけるために、自分のなしうることは多いと信じ、日々を送っている。

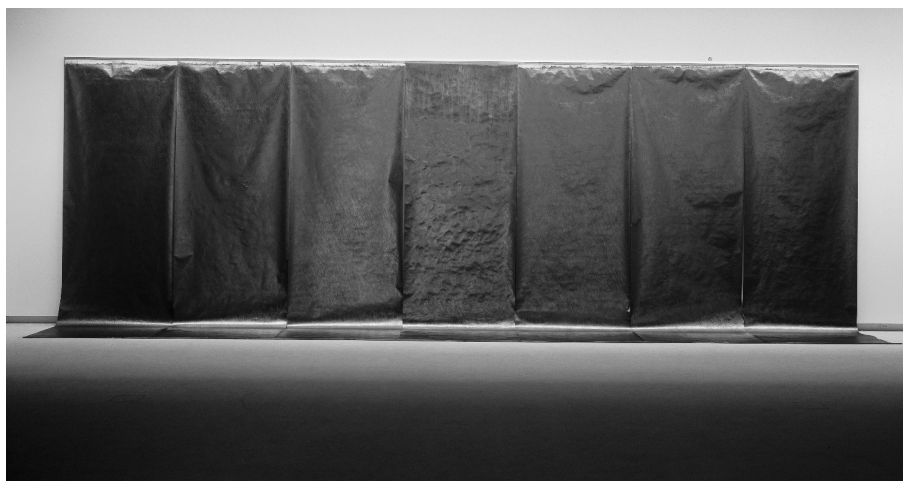


写真1 岡部昌生《ヒロシマ—8月の路上 1987/88》
1987/88年 広島市現代美術館所蔵



写真2・3 「ヒロシマ・メモワール'96」ワークショップ風景 平和記念公園にて
1996年 撮影:オーシマ・スタジオ



写真5 「ヒロシマ・メモワール'96」ワークショップ風景
旧国鉄宇品駅にて
プラットホームの縁石をそれぞれフロッターージュした
1996年 撮影:西田浩



写真4 「ヒロシマ・メモワール'96」ワークショップ風景
旧国鉄宇品駅にて 一番手前が岡部昌生
1996年 撮影:西田浩

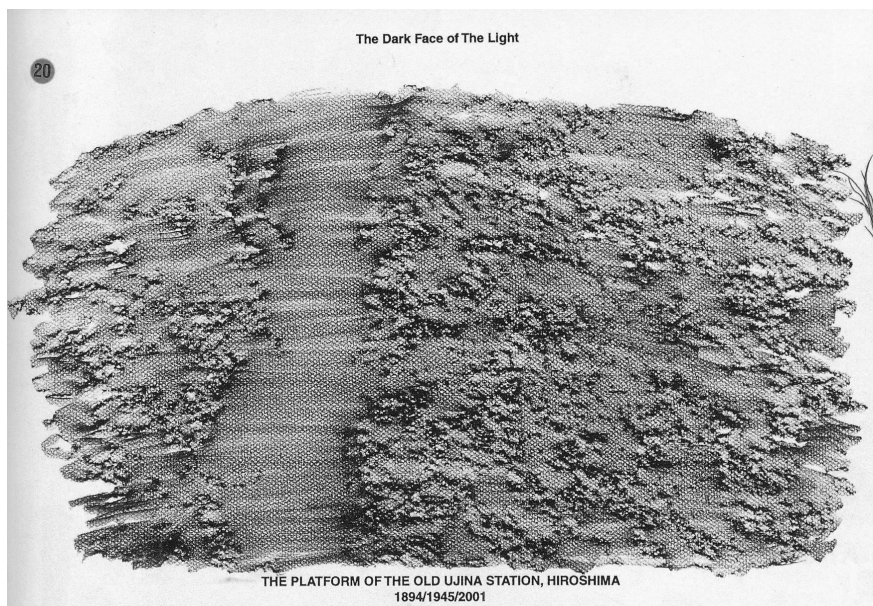


写真6 《THE DARK FACE OF THE LIGHT(光のなかの影)》シリーズより



写真7 第52回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館 岡部昌生個展 2007年 撮影:港千尋